

- 土博物館友の会
 3) 伊藤浩司 (1969): 北オホーツク沿岸の植物相の一端 (北オホーツク沿岸文化財調査報告書). 北海道教育委員会
 4) 原 松次 (1990): 札幌市北東部低地帯の植物. 「北海道の自然と生物」VOL. 2, カヤ書店

オオバナイトタヌキモの 北海道現況

外山 雅寛

オオバナイトタヌキモ *Utricularia exoleta* R. Br. subsp. *gibba* P. Taylor は新大陸原産の水生の食虫植物で、日本産のイトタヌキモ *Utricularia exoleta* R. Br. の母種と考えられているものである。両者の区別は外見上では不可能のようで極めて酷似している。オオバナイトタヌキモは、花が大変大きなことによって、日本産のイトタヌキモと区別されている。

以下、北海道にて知り得たオオバナイトタヌキモの現況を記しておきたい。

北海道で確認されたオオバナイトタヌキモの現況

著者は1度オオバナイトタヌキモを培養してみたいと思っていたが、外国産のこの食虫植物が、他の水草についてきて、北海道の室内の水そうの中にごく普通に見られるものであることを知ったのはごく最近のことである。

教室内のメダカ用水そうの中で見た本種を最初はイトタヌキモと思っていたが、小宮定志博士 (日本歯科大) よりの御教示によりオオバナイトタヌキモであることが判明したものである。

本種は他の水草に混入して北海道各地の教室の水そう内で目撃されている。小学校5年生の教材にメダカの発生が取り扱われているので、恐らく全国的に見られるものと推定される。

この種は、日本の暖地に1部帰化しているようであるが、日本植物としては取り扱われてはいない。

試みに熱帯魚用の水草販売店を訪れてみたところ、やはり本種が他の水草に混入していることが確認された。繁殖力がよく、水そう内ではどんどん増える。

ただし、北海道の自然状態の中では確認されていないし、寒冷な北海道では帰化植物とはなり得ない植物であ

る。本州の暖地では、本種の逸出したものがイトタヌキモと同定されているケースは十分あり得るかもしれない。

食虫植物とは知られずに

本種が道内各地の小学校の水そうの中に見い出されたことは前述の通りであるが、それが食虫植物と気づかれているケースは全くなかった。水そう内では大繁殖するが、捕虫のうが小さいのでメダカの幼魚を取り込むことはないかもしれないが、これがタヌキモならば捕虫のうが大きいので、たちまち食べられてしまうのだが……。

岐阜県南濃町における

オニバスの現況

嶋田 直哉

岐阜県下のオニバスについては、本会員の磯部氏によって報告されている。私は、4年程前から他の目的でその地を訪れていたが、時期的なものもあって、オニバスの生育期に御目に掛かることはなかった。が、多量の種子殻が水辺に浮いていたことから、オニバスの存在は知っていた。氏の報告後、オニバスの生育は不良であるので現状を報告することにする。

南濃町のため池群は今、大きく変わろうとしている。農業用水確保のために利用してきた昔からの古池を、自然の地形を利用した釣り池にしてしまったのである。しかも、大型魚を移入し、それに伴い釣り客が使用する人工餌により土壌や水質が悪化し、水草などは殆ど消滅してしまった。また、幾つかのため池は埋め立てられてるなど、水辺の環境が悪い方に変わってきている。それと云うのも、その影には宅地開発の波が、確実に迫っていることにあった。見るかぎり水田しかない土地は、碁盤の目のように細い道と水路が走っており、所々にため池や幅の広いため池的な水路がある。開発の手始めとして道路の整備、水路の整備を行っているのである。道路の拡張工事に伴った埋め立てや、水路を直線化し、三面護岸や全面コンクリート護岸を国の援助で行っている。そのようなことが進行している今、昔ながらの古池や素掘り水路が姿を消し、そこに生きづいていたあらゆる生物が姿を消してしまった。埋め立てた跡地は開発工事のための土木資材置き場として利用したり、跡地を中心とする宅用地の開発の利用となっている。このような現状は全国的にあることで、私たちは今、二度と後にはもど